

平成 29 年度・30 年度の研究

学校研究主題	子どもたちが変わる確かな学び
--------	----------------

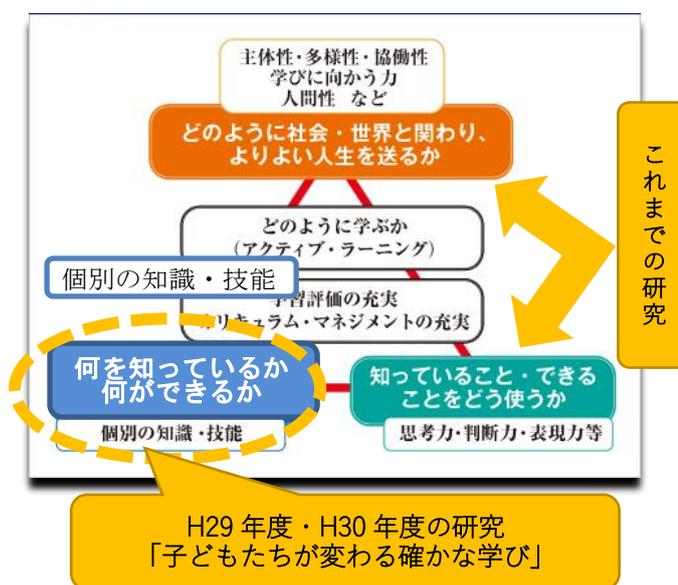
1 主題設定の理由

本校は、平成 26 年度から「一人一人が主体的に活動する授業づくり」を学校研究主題に掲げ、各学部で実際のテーマを設定し研究を進めてきた。子どもたちの生きる力を育むためには主体的な学びが大切であると考え、実践のまとめを平成 28 年 12 月の第 1 回公開研究会で発表した。

これまでの研究では、子どもたちが主体的に活動する姿として自ら思考・判断し、行動する活動場面が多くなる授業実践に取り組み、各学部で授業づくりの成果を積み上げることができた。平成 28 年度は実態把握や実践の検証に特に重点をおき、各学部では、客観的な情報に基づき研究を進めてきたが、「主体性」という言葉にこだわったことが大きな枠組みで研究を進める原因になり、理念的、観念的にまとめざるをえない課題も残った。そこで、上記のように主題を新たに設け、子どもたちが何を知り、何ができるようになったかについて具体的で確かな成果を積み上げていく必要があると考えた。

平成 29 年度からは、子どもたちの「確かな学び」とは何かを考え、授業の中でどのような手だてや支援を行うと知識や技能が獲得できるのかを变容に基づいて検討し、有効な支援方法等を明らかにしていきたいと考え、研究をスタートした。このことは学習指導要領改訂に向けた論点整理<図 1>で示された育成すべき資質・能力の三つの柱のうち、何を知っているのか何ができるのか、つまり知識・技能の育成に焦点をあてた取り組みになると考えられ、それらは必ず他の力やこれまでの研究でアプローチしてきた主体性や思考・判断し行動する力等の向上にも繋がるものである。

「子どもたちが変わる確かな学び」を新しい研究主題とし、子どもたちの変化や伸びにこだわり、それが生活でどのように役立っていくのか、生きる力に繋がっていくのかをみていきたい。



<図 1> 育成すべき資質・能力の三つの柱

参考：学習指導要領改訂に向けた論点整理（文科省）

2 研究目的

- ・子どもたちの変容に基づいて検討し、確かに変わる有効な支援方法等を明らかにする。
- ・子どもたちが確かに変わる授業のあり方を検討する。

3 研究計画

- (1) 平成 29 年度・30 年度の 2 か年計画とする。
- (2) 平成 30 年度の公開研究会で 2 か年の研究のまとめを発表する。
- (3) 平成 29 年度は第 3 集、平成 30 年度は第 4 集として研究紀要にまとめる。

4 各部門の取り組み

A 部門

I・II 類型	児童生徒の経験不足を補い、基礎的な知識技能の定着と、積極的に発言する活発な授業をめざす。
III～V 類型	児童生徒の反応、動きを引き出す授業をめざす（反応の特定化、定型化、明確化）。外部の環境変化との関係づけ、確実な反応を引き出すことをめざす。

B 部門

小学部 中学部	軽度	文字の読み書きや、数の計算など教科別の指導を行い、児童生徒が積極的に教科学習に取り組むことをめざす。
	中・重度	基礎的な文字や数の理解を深め、定着をめざす。弁別や分類など学習の基礎となる反応を形成することをめざす。
高等部	軽度	生活の中で生かすことを前提とした教科別の指導を行い、教科書を使って、系統的な学習内容の定着をめざす。
	中・重度	生活が充実する生活単元学習をめざす。

5 H29年度の各学部の取り組み（研究紀要第3集より抜粋）

<p>肢 小学部</p>	<p style="text-align: center;">「障害の重い児童の確かな学び ～手の動きを引き出すために～」</p> <p>障害の重い児童の課題の一つである手の動きにねらいを絞り、研究に取り組んだ。手の動きを引き出し積み上げることが対象児の確かな学びと考え、支援を焦点化し、その有効性を検証した。児童Aについては教材への左手の動きを引き出すための姿勢に、児童Bについてはスムーズなスイッチ操作のためのマッサージに焦点を絞り、支援を行った。実践の様子をビデオに録り、結果をデータ分析することで客観的な評価を行った。その結果、どちらの児童についても有効性が検証できなかった。この結果をもとに今後、新たな手だてを試みていきたい。</p>
<p>肢 中学部</p>	<p style="text-align: center;">「障害の重い生徒の確かな学び ～人と関わる力を育むことをめざして～」</p> <p>重度重複障害に対応した教育課程で学ぶ生徒が増加傾向にある。そこで、学校研究主題の「子どもたちが変わる確かな学び」を受けて、実態把握や指導目標の設定が難しい「障害の重い生徒の確かな学び」について研究することにした。まず、実態把握が難しい生徒に対する「気づき」を学部全体で出し合い、実態把握の信頼度を高めていくようにした。そして、実態を自立活動の6区分に整理し、それをもとに自立活動の課題関連図を作成して指導目標を設定した。その指導目標を達成するための課題【環境の把握（認知）】と【人間関係の形成】に関する検査を基に、生徒の変容を検証しながら授業改善に取り組み、支援方法や環境設定、教材教具を工夫した。また、発達検査やコミュニケーションの発達評価シートによるチェックリストは、目標設定や具体的な支援を考える上で有効だった。</p>
<p>肢 高等部</p>	<p style="text-align: center;">「障害の重い生徒の確かな学び ～発信力を高める指導のあり方～」</p> <p>内言語が多く社交的な性格の生徒が、発音の不明瞭さを補うために支援機器を活用することで、場面や相手を限定せずに自分の思いを伝えることができると考えた。意思伝達における課題から、「注意を引く手段の獲得」と「思いを明確に伝える手段の獲得」をめざして、タブレット端末を活用した実践を重ねた。その結果、教師の注意を確実に引くことや自分の思いを伝えることができ、タブレット端末の便利さに気づき、発言回数の増加や発言内容の質の向上が見られた。日常的な使用に向けて、活用場面の広がりや実態に合わせた環境設定が今後の課題である。</p>
<p>在宅訪問</p>	<p style="text-align: center;">「障害の重い児童の確かな学び ～「感じる」から「思いを伝える」へ～」</p> <p>快表出が見られるようになったシーツブランコの活動をとおして、もう1度やりたいたいという思いを、児童の随意的な手の動きで表現することをねらい、児童にわかりやすく、児童が思いを伝えやすい支援とは何かを探った。期待する姿には到達しなかったが、児童に届きやすい音や見えやすさにつながる環境の工夫、思いを伝えやすい支援についての手掛かりが得られた。</p>

知 小 学 部	<p style="text-align: center;">「読む力、書く力を育てるための効果的な指導、支援の工夫」</p> <p>研究対象児童を絞り、読み書きの指導の経過を記録し、事例検討会を行い、話し合ったことをいかして授業改善を行った。また、教師はどのような指導、支援を重点的に行っているのか、指導、支援の内容を記録から掘り起こしとまとめた。その結果、以下の3点が効果的であることが明らかになった。</p> <p>①「読み」「書き」とともに、児童の意欲を喚起する教材や課題を工夫すること</p> <p>②「読み」では、国語の授業以外でも日常的に文字を読む場（集団の場）を設けること</p> <p>③「書き」では、同じ躰きがある児童でも、それぞれの児童に合った指導法を見るけること</p>
知 中 学 部	<p style="text-align: center;">「読み書き困難の理解と支援について」</p> <p>口頭でのコミュニケーションが比較的できていると思われる生徒に見られる学習の理解が進みにくい事例に対し、「発達性読み書き障害」に関する研究の視点をいかして対象生徒の「文字や言葉の認知の状態」を諸検査によって把握し、それに基づいた学習方法を検討し実践する研究に取り組んだ。対象生徒からは「文章を読むことが著しく遅い」「文字を見て、その音を想起すること（その逆の操作も）が苦手」「逐字的に文字を捉えていて言葉を文字のかたまりとして捉えることが難しい」等の特徴と共に、認知に関する比較的得意とする点も明らかになった。逐字読み傾向にある子どもは、読むことに時間とエネルギーを要して疲労を感じやすく、内容を理解するまでには至らないことが多い。そこで、言葉をまとまりとして捉える視覚性語彙を増やす学習を、その生徒が比較的得意とする認知特性をいかして取り組むことで、読みの流暢性が向上し、学習内容の理解や生徒の自信を高めることに役立つと考えた。実践により対象生徒の読む力が向上し、文を読むことへの意欲や自信が高まる結果となった。</p>
知 高 等 部	<p style="text-align: center;">「卒業後の生活につながる教科指導の在り方 ～書字・文章化能力を高める授業づくり～」</p> <p>卒業後の生活につながる教科指導の在り方を探るため、国語科の授業改善及び事例研究に取り組んだ。研究対象生徒について学級担任、国語科担当教師、臨床発達心理士の資格を持つ教育相談担当教師による客観的事実に基づいた多角的な実態把握及び分析を行ったところ、個人内の能力に大きな差が生じていることが明らかになった。そこで、本生徒の「弱い能力」（書字・文章化能力）に対して、本生徒の「強い能力」を生かした学習指導内容及び手だての工夫、評価の明確化を行い、その方策の有効性を明らかにした。</p>